

周辺地形より見た道路遺構の考察

下 鶴 弘（始良町教育委員会）

1 はじめに

筆者は、本遺跡発掘中に道路遺構を見学する機会を得た。当時はどうしてこんな立派な道跡がここにあるのだろうという漠然とした感想しかもたなかった。しかしながら、その後「歴史の道大口筋白銀坂整備事業」に関連して、周辺の脇元や重富麓を調査した際に二、三気づいた点があるので、以下に記述しておきたい。今回検出された道路遺構の性格解明の一助となれば幸いである。

2 江戸時代の絵図

まず最初に、道路遺構のある脇元周辺の地形を考えるために江戸時代の絵図を確認してみたい。写真1は元文2年（1730）の『重富郷一所之地絵図』（始良町歴史民俗資料館蔵）である。図中の鹿兒島湾に注ぐ思川河口は、現在よりも南の脇元浦近くを流れている。写真2は天保年間頃の『重富郷絵図』（東大史料編纂所蔵）である。図中の黒い実線は村境を示し、内側は脇元村である。

「町」と記載された場所は脇元の「町」であり、四つの長方形街区によって町が構成されていることがわかる。町中を抜け帖佐境へ延びる道は大口筋であり、両側に並木が表現してある。

写真2では思川河口は二つに別れ、南は「古川跡」北は「新川筋」と朱書きがある。写真2以前の絵図には「新川筋」は認められない¹⁾。この河川変更が自然作用によるものか、又は人為的な「川直し」によるものかは定かでないが、周囲にも大きな影響を与えた出来事だったと想像される。恐らく今日我々の見慣れた風景も各時代に様々な地形の改変を受けてきたに違いない。

3 明治時代の測量図と小字図

第6図の明治35年測量図を見ると、「天保郷絵図」に見られた「古川」の痕跡は認められず、すでに水田化している。重富麓の成立は、江戸中期の元文4年（1739）に越前（重富）島津氏が創設され、私領として重富郷が与えられ、館（平松城・現重富小学校）及び麓（小字名「星原」）をこの地に構えた。浦町であった脇元は、重富郷創設により元文4年以降に整備し直されたと推測される。

ここで、第7図周辺小字図を第6図測量図と対比しながら見てみたい。思川の「古川跡」に対応する小字名は、「洲崎・旧塩屋・平俣・渡瀬」（耕地整理により字界変更の可能性はある）である。

「渡瀬」の南隣には「橋ノ口」があり、「古川」に関係した地名と考えられる。思川右岸の大きく蛇行した所には、「下水流」「中水流」という河川氾濫原に由来する字名があり、左岸側を長い年月をかけて浸食した経緯が読み取れる。今回の道路遺構は「白金原」に位置する。

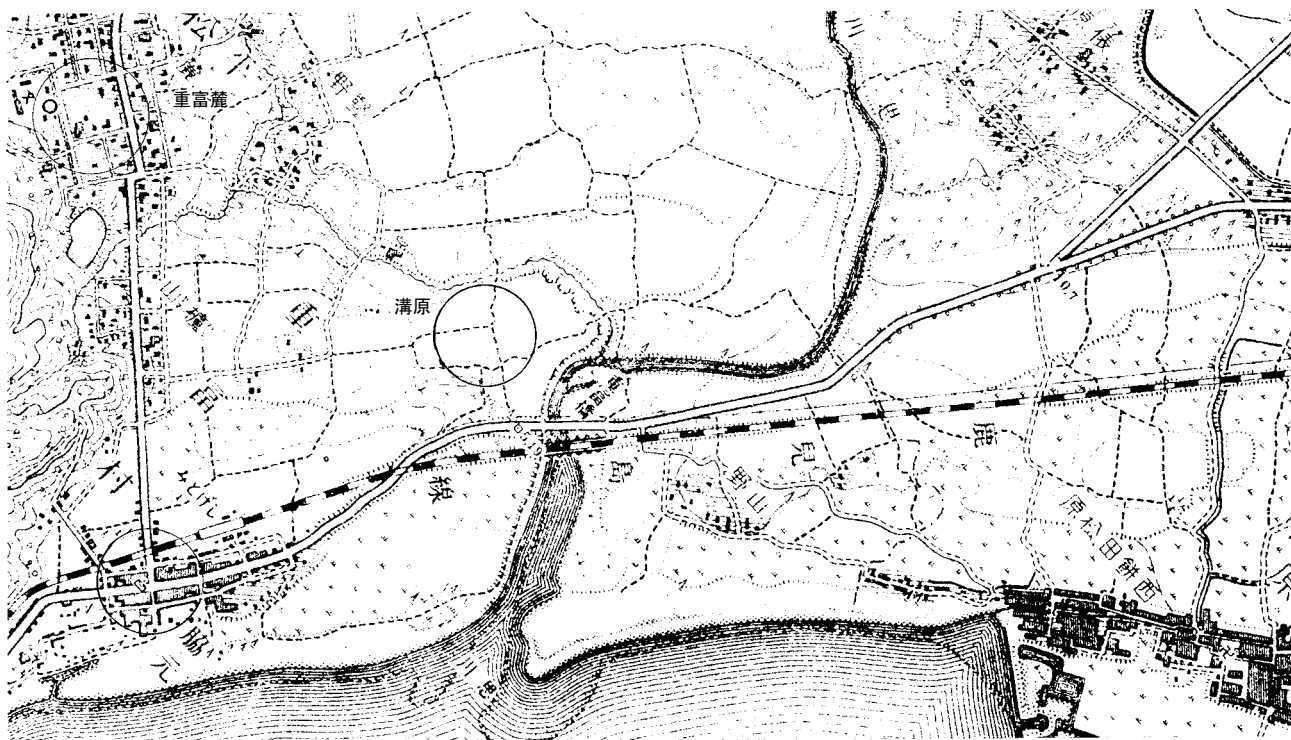
また、周辺の地籍図を検討中に気付いたのだが、「西溝原・東溝原」に古い町割りの痕跡が認められた。第8図脇元・溝原地籍図がそれである。中央に道路が走り、短冊状の町割りと同端の横丁に特徴がある。近世の典型的な長方形街区とはやや異なり、ひとつ時代が古い印象を受ける。



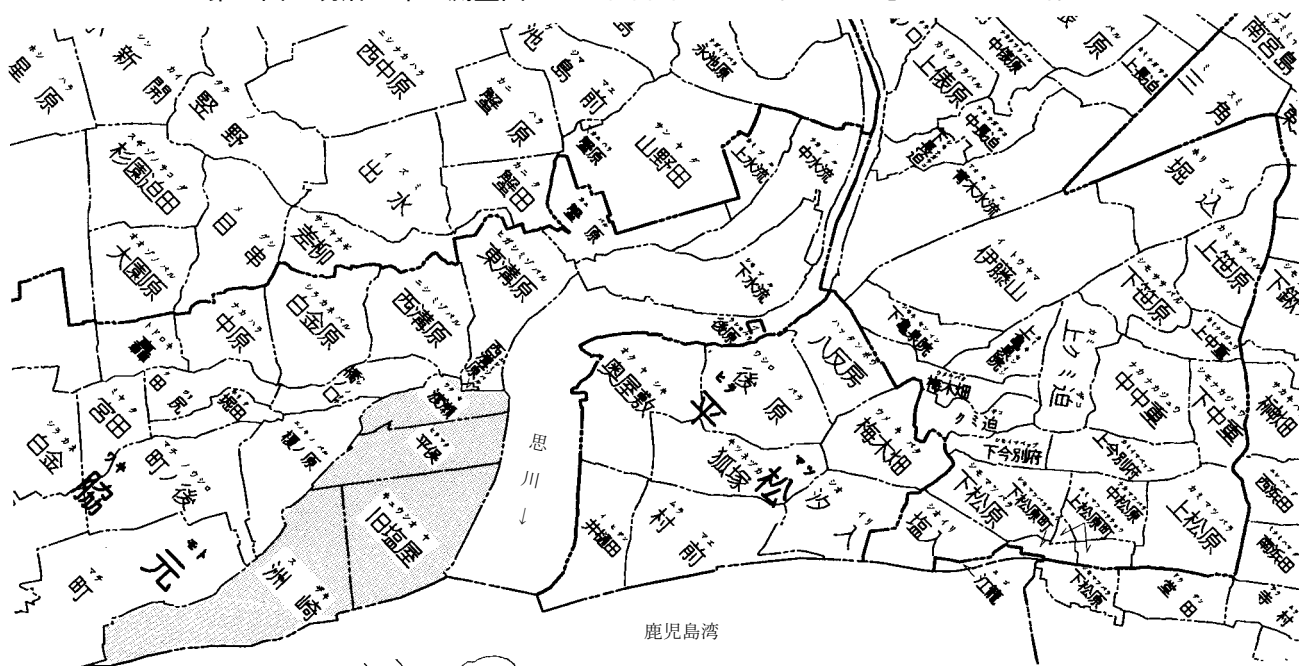
写真1 『重富郷一所之地絵図』(始良町歴史民俗資料館蔵)



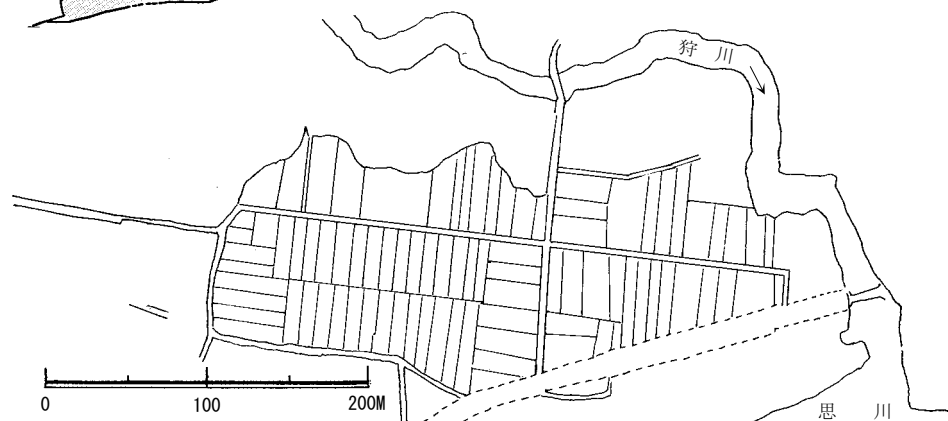
写真2 『重富郷絵図』(東京大学史料編纂所蔵・部分拡大)



第6図 明治35年の測量図（大日本帝国陸地測量部「加治木」二万分の一抜粋）



第7図 周辺小字図



第8図
脇元・溝原地籍図

4 脇元地区における大口筋の変遷

今回検出された道路遺構は、その規模と構造から鹿児島における近世の幹線道路と考えられる。しかしながら、現在この地を通る大口筋の想定ルート（旧国道10号）から170mほど離れており、そのまま接続していたとは考えにくい。街道は時代とともに変遷があったのではないだろうか。資料・文献が少なく論証は困難であるが、検出道路遺構の位置づけを大胆に以下推定してみたい。

第9図は、思川河口近くの蛇行がまだ見られない頃の大口筋想定路である。A地点が今回の検出道路遺構箇所である。白銀坂からの降り口も愛宕神社の西側S（布引滝入口）を巡っていた可能性がある。降り口からA地点を経由して思川までは直線道路となり、B古川を直角に渡り、C-D-A（高樋）を抜ける道を大口筋Ⅰと想定したい。C地点はその後に浸食されたと考えている。大口筋Ⅰの成立は、戦国時代末から江戸初期を想定している。

第10図によりC地点浸食後の大口筋Ⅱについて述べたい。白銀坂からの降り口は大口筋Ⅰと同じく、S-E（現町道）-脇元Ⅰ（溝原町割）-F（国道10号バイパス）-G-H（現青木水流橋）-Aというルートである。街道上に脇元Ⅰという町割の創設と渡河点の変更が特徴である。なお、脇元Ⅰは地籍図のみを根拠に想定したので、今後の考古学的調査により検証する必要がある。

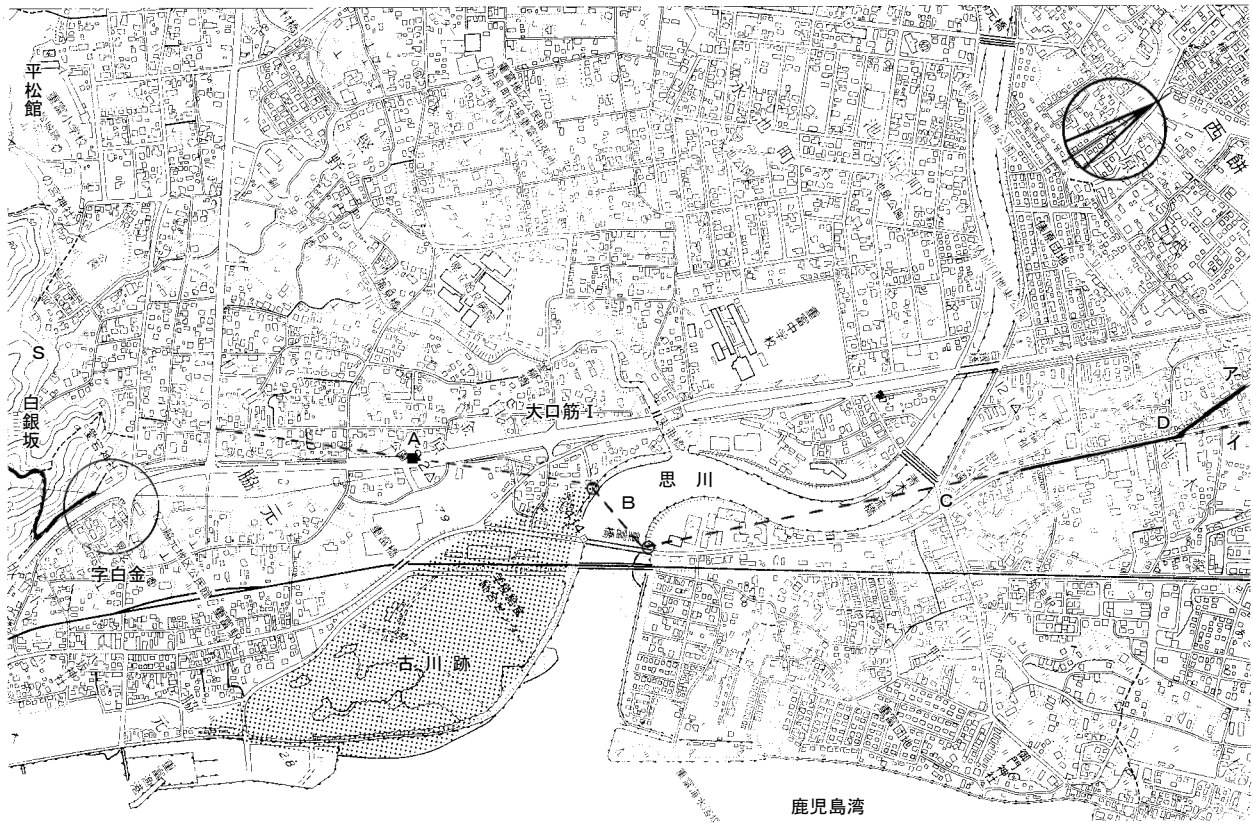
この大口筋Ⅱのルートも思川の氾濫により被害を受けたのであろう。特に、脇元Ⅰは標高が4.5mしかなく、東側Lには小河川（小字「橋ノ口・堀田・田尻」）が流れていた可能性があり、西側の狩川とともに「中の島」状の低位立地であった。このため早い時期に脇元Ⅰは見捨てられ、脇元Ⅱへの移住が行われたと思われる（規模はほぼ同じ）。これに伴い、大口筋の付け替えも行われたと推定される。つまり、白銀坂R-脇元Ⅱ・K-L（-F-H）の大口筋Ⅲである。この成立時期は、写真1の元文以前（1739）であり、脇元Ⅱも新しい街路V（20間×60間の長方形街区）と古い街路K（短冊地割のみ。重富麓成立以前）に分かれるので、大口筋Ⅲは17世紀後半を想定し、元文以後に脇元Ⅱの新しい街路Vが重富麓や朽山集落と共に計画的町割に基づき成立したと推定される。

天保年間には、写真2のとおり思川河口の変更があり、古川から新川筋となる。これによって再び大口筋の付け替えが行われ、脇元Ⅱ-M渡河点-Q-Iの大口筋Ⅳとなる。道路線形としては直線箇所がなくなり、脇元Ⅱが海へ張り出した形となった。大口筋Ⅳは明治6年以降も国道としてその役目を果たした。

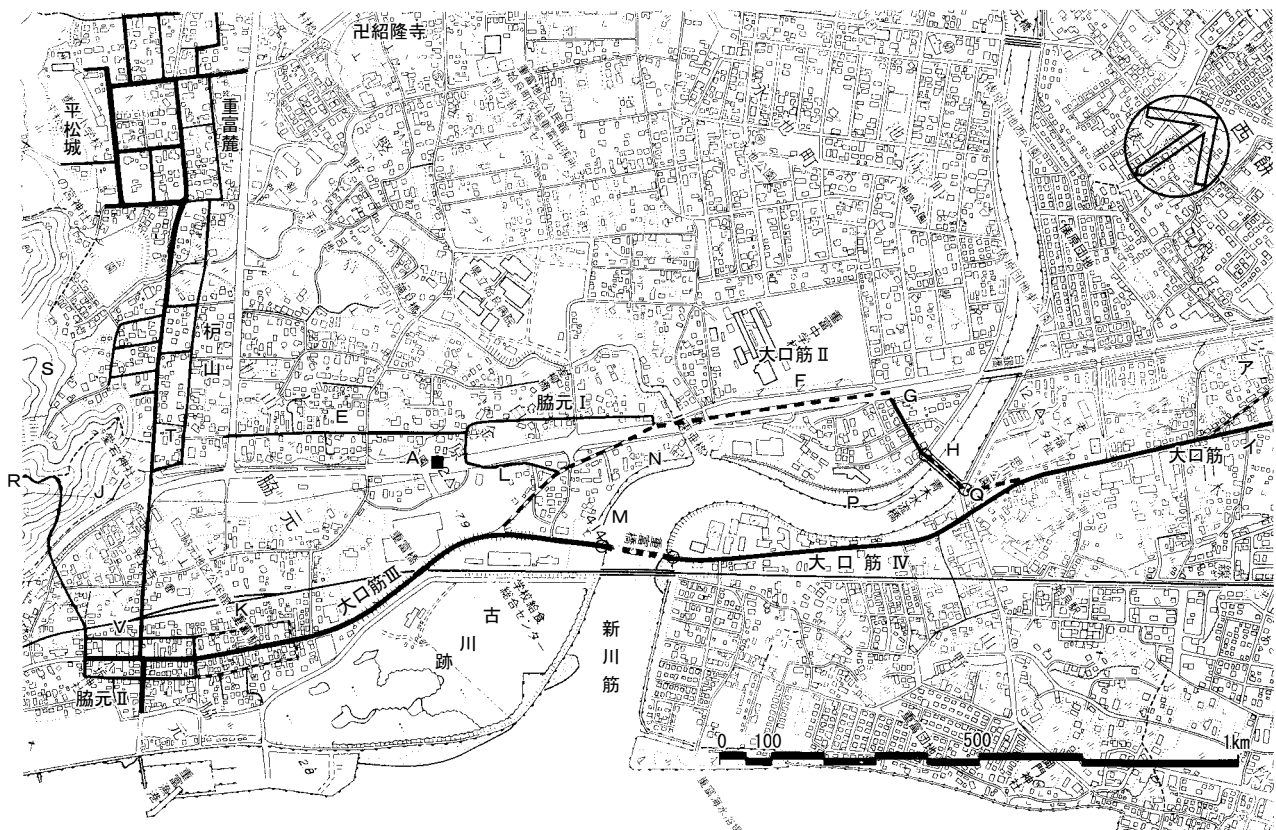
以上のとおり、脇元町・重富麓・思川の変化を基に大口筋の変遷を大口筋Ⅰ～Ⅳ期に想定してみた。その結果、今回の検出道路遺構は、現在知りえる最古の大口筋の一部である可能性が高く、貴重な発見であったと思う。勿論、前述の想定根拠が不十分であることは承知しているが、今後の調査課題として敢えて提起した次第である。

【 註 】

- 1 鹿児島県教育委員会 1997 「元禄十五年 薩摩國・大隅國・日向國 国絵図解説書」『歴史の道整備活用推進事業 鹿児島藩国絵図解説書』。川筋は「元禄国絵図」を参照した限りでは、『重富郷絵図』と同様（古川跡）の表記に見える。



第9図 大字脇元地内の大口筋Ⅰ



第10図 大字脇元地内の大口筋Ⅱ，Ⅲ